



46 館谷有民、渡邊萬里《舟形花盛器》 一点

大正十二年（一九二二） 銀、鍛造  
 総一五・〇×四六・八×三二・七

大正十二年四月、皇太子（昭和天皇）が台湾に行啓された折に台北州知事高田富藏より献上された銀製の花盛器である。高台内に「大正十二年五月作之 彫金館谷有民渡邊萬里 図案中川泳舟」と刻銘があり、実際には行啓の後に完成して納められたことが判る。花盛器の形は、台湾原住民であるタオ族が漁労に用いるチヌリクランあるいはタタラと呼ばれる木造船をもとにデザインされていると考えられ、幾何学的な連続模様や、船首と船尾に配された円文も実際に用いられている船の装飾によく共通している。花盛器の中央表裏には、台湾の農村に象徴される水牛の顔を、高台の部分には蛇を配している。水牛の目にはメノウ、文様部分にヒスイを嵌めている。貝や貴石で飾られた紫檀台がともなう。

図案を担当した中川泳舟については詳らかでない。金工を担当したのは館谷有民（一八六九〜一九四〇）と渡邊萬里（一八七二〜一九五五）である。館谷は初代池戸民国の門下で学んだ彫金家である。また、渡邊は大正六年に帝室技芸員となった平田宗幸の門人で、打物師としての技を受け継ぎ、昭和二年第八回帝展では鎚起作品を発表している。伝統的な金工技術により、異文化の造形の魅力を存分に伝える品である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan